

〈書 評〉スタンリー・カベル著 齋藤直子訳『センス・オブ・ウォールデン』
行為としてのことば

辻 敦 子

『ウォールデン』において、読むことは、書くことの裏返し、書くことの行き着く果ての運命ではない。読むことは、書くということそれ自体のもうひとつの隠喩である。

『センス・オブ・ウォールデン』(36頁)

1. 新たなる問いへの触発

何もないところに何かを見ることで、わたしたちは語り出し、そして書き始める。そうだとするならば、書くことの表現の基盤はあくまでわたしたちが恣意的につくりだしたもの、ということになる。このように世界のあらわれ方はわたしたちのものの見方によっているのだと断定することは、あらかじめ「真理」を知り得ないものとして「わたし」と分けてはじめて可能になる。しかし、テキスト『ウォールデン』を読み、そして『センス・オブ・ウォールデン』を書くスタンリー・カベル (Stanley Cavell) は、このものの見方、書くことの表現の基盤には、そもそも「外部性」がかかかわっているとす¹⁾。カベルにとってこの外部性は、『ウォールデン』であるといえるだろう²⁾。外部性は「召命」とも言い換えられており、常にわたしたちに呼びかけ、わたしたちを触発している。この呼びかけは、世界の捉え難さとして感じられるが、この捉え難さに対して、わたしたちが耳を傾けることはほとんどない。

本書の序文においてカベルは、広がり、深まりゆく問いの連鎖の中で次のように問うている。「いかにしてひとつの哲学のテキストが別のものによって触発されるのか」そして、「なぜ哲学史はそのような諸々の触発の歴史であるのか」³⁾。触発は、一触即発の危険な破壊性をも有するものとして捉えられている。カベル-ソローにおいて、テキストからの触発をうけて問いの連鎖に身を置くことは、生死を決する力を賭けて、外部性からの呼びかけに応答しようとするものである。そして、『ウォールデン』、その書き手、読み手、そして新たなる書き手となるべき「私」の課題は、それぞれ問いへの触発として描かれることになる。つまり、書くという行為は、世界の捉え難さとしての外部性を問いとして受け取り、さらなる問いへと一步を踏み出すその一瞬に立とうとする行為なのである。そして、この一瞬を二重性として捉えていくところに、カベルのテキストとのかかわり方があらわれている。それは、「なぜ」という問いの立て方からの解放への企図でもある。書く行為は、「なぜ」という問いに1対1で対応する等価物としての答えの所有を、放棄することでもあるからだ。カベルは書く行為を次のように述べている。

書き手は、「永続的な示唆と挑発」としてことばを発明することはできない。書かれたことばは、すでに「選り抜きの過去の遺物」である。彼の召命は、ことばについてのこの事実を受け容れることにかかっている。つまり、ことば自身の領域から、ことばが彼のもとを訪れるようにさせること、そして、その機会をとらえて、大地を草ではなくマメの方向に向けて屈折させたり、あなたがそこに到来する以前の孤立状態にあらしめるといったように、ことばをその時その場であえてある方向に屈折させたり、あるいは、その時その場で抑えたりすることである⁴⁾。

世界の捉え難さとして感じられる召命を受けた書き手のことばは、ことばすなわち万物の創造である神のことばのように、永続的な真理ではない。ゆえに呼びかけから答えを引き出し、それを所有しようとすることは、常に失敗に終わる。書き手のことばがつかみ取るのは、あくまで「揮発性の真理」でしかないのだ。だからこそ、呼びかけられるたびごとに、書き手はことば固有の重みを感じ、それを大地に書きつけなくてはならない。書き手の鋏のひとかきは、すなわちマメの結実にのみ結びついている。同様に召命である書く行為は、書くということのみに仕えている。カベルがソローのテキストから学び取ったのは、このような書く行為であった。ソローの書く行為についてカベルは、「あることが書かれるという事実そのものが、言われている内容と同じく重要であるというかのよう」であると述べている⁵⁾。これは、カベルにおいて書く行為が、「私」と捉えがたい外部性との関係として再発見されていることとかわわっている。

2. 関係としての行為

カベルは、ソローが「自らの書く行為が生活の代替物ではなく生活の営み方である」と確信していたと述べる⁶⁾。ソローは、「書き手であるゆえに書く」。召命として書く行為を遂行することは、わたしたちの「真理」にかかわる実在が、現在の暮らし方 (my mode of living) でしかないということを示しているのである。わたしたちは生活において、自らの実在をはるかかなたに追いやることで、「いつかは本当に自分がやりたいと思うことをしたい」と、現在の生活を偽物の生活にしてしまう。そのような事態は、「真理」を知り得ないものとして自らの生活から切り離してしまうことでもある。だが、わたしたちが聴く耳をもっているならば、常にわたしたちに届けられている「真理」を聴き取ることができるのだ。ただ「真理」は、世界の捉え難さとしてのみ感じられるために、わたしたちにとっては、秘密として立ち現れてくる。

自然は、その最も壮大なアレンジメントにおいても、最も小さな音においても、いかなる瞬間においても、われわれに対して開放的に秘密を打ち明けているということ、そして、そうして打ち明けられる自然の大半は、書き手たちによって見失われてしまうということである⁷⁾。

このような秘密としての「真理」の見過ごしは、書く行為が「私」の支配できない外部性からの呼びかけによってしか動き始めないために、必然的に生じる。カベルは、ソローが否応なく生じるこの見過ごしに意識的であったという。そして、『ウォールデン』の中心的な教えは、「最高の傑作の偉大さの見過ごしについて余すところなく語ることだ」としている。その教えは、「真理」の秘密が立ち現れる瞬間ごとに書きつけられた『ウォールデン』というテキストとして私たちの前に開かれている。またそれは、「真理」が自らの暮らし方にかかわってはじめて立ち現れるものであることを示してもいる。このように考えてくれば、「真理」の秘密を暴き、引き出した答えに安住してしまうことも、「真理」を知り得ないとすること同様、自らの実在を生きることの拒絶となる。

先にも述べたように、二重性はカベルのテキストとのかかわり方を特徴づけている。このことを考えていくためには、カベルにおいて、書く行為へと触発する外部性が、公的意見と鋭く対立させられていることを思い起こす必要がある。カベルは、「世論」を生きることの指標とすることをやめるように呼びかけるのだ。世論ではなく、外部性にこそ、世界の捉え難さにこそ各自の耳を澄まさなければならない。それを聴き取ることで、わたしたちは自らの生活を偽物として生きるではなく、召命として生きはじめる。カベル-ソローは、それを「時の改良」と呼ぶ。

どのような人がもつ機会も、他人のものとまったく同じではないが、改良の諸条件、とりわけわれわれの外部性というものは同じであり、したがって、世界のわれわれに対するありようは同じである。そうした諸条件は、どのようなものであろうとも、それぞれの召命のうちで実現されることになる⁹⁾。

ここでいわれる外部性は、「ことば」と読み替えることができる。「われわれはことばのうちへと生まれ落ちる」⁹⁾。自らの行為を方向づけるこの外部性は、自己にとって疎遠なもの、見知らぬもの、制御不可能な「何ものか」である。

感覚全体にとって言いようがないほど、また、紛いようがないほど心地よい何ものかに対して五感を平静に保ち、別の耳の傾け方をしなければならない。二重性の感覚は、内なる居住者として無意識的に建てることに従事するという側面からみたおのれ自身と、公正に観察する傍観者という側面からみたおのれ自身の間の関係として再解釈されなければならない（強調は引用者による）¹⁰⁾。

ここで言われる二重性の感覚は、あくまで「二重性」であって、見られる主体と見る主体の分離といった近代的主体の自己確立とは性質を異にするものである。カベル-ソローは、次の一步を踏み出す瞬間、その束の間を「私」と私ならざる「何ものか」との関係として捉え直そうとするのだ。そのような瞬間を経て歩みだされた一步は、世界の捉え難さをあえて

引き受けようとする書き手の決意 (resolution) である。この決意は、何らかの賭けであると同時に、腰を落ち着けることでもある。なぜなら、このような二重性の感覚において書く行為が「再 (re-)」という接頭辞によって特徴づけられているからだ。

引用にも挙げたように、書き手は、「永続的な示唆と挑発」としてことばを新たに発明することはできない。書かれることばは、常に再発見された言葉である。ソローは、話し言葉／聞き言葉を「母の言語」、書き言葉／読み言葉を「父の言語」と呼び区別しているが、カベルはこの「父の言語」を「われわれがすでに身を置いていて避けることのできない、完全に固有な音節に献身しなすこと」であるとしている¹¹⁾。召命としての書く行為はわたしたちがそれとは知らず、すでに生きてしまっている生活を書く。だからこそ、常に「再び」なのである。それは、書かれることばと行為が不可分であることとも結びついている。わたしたちが、それと意識しないままに従事しているあらゆる行為は、すでにわたしたちによって為されている。しかも、わたしたちの決意において為されている。わたしたちは自らの生活が、二重性の感覚を経た各自の決断であることを、自分自身に隠蔽しながら生きている。だがカベルによると来るべき未来のために今の生活があるというのではなく、召命を聴き取り、今この時を改良するためにこそ生きているのだということが、書く行為において再び見出されるのだ。

また、あるテキストは別のテキストからの触発によってのみ書かれうる。その意味で、テキストは常に再解釈である。カベルはこれを、改訂／予見の仕直し (revision) と呼んでいる。書く行為は、自分自身についてではなく、他の「何ものか」について書く。いや、むしろ「何ものか」が書くのである。「真の沈黙は、口を開き、ことばを解き放つことである」¹²⁾。カベルは、『ウォールデン』による二重性の説明の基調をなすものは行動として構想される統合性の概念である」と述べているが、それは、自らの決意としての行為の基盤に、私ならざる「何ものか」が常にすでに入り込んでいることを示している¹³⁾。だからこそ、このような行為の基盤が「朦朧生の極地」において追究されることになるのだ。だが、ことばを書きつけた刹那、「今」を認識した刹那、二重性の感覚にある瞬間は失われる。カベルはこれを「時の認識そのものによって、現在性が損なわれる」と述べている¹⁴⁾。このことは、永続的な「真理」の所有が、わたしたちには叶わないこととむすびついてもいる。したがって、書き手が表現を再発見することは「差し迫った希望と差し迫った絶望の瞬間に関連づけ」られることとなる¹⁵⁾。この希望と絶望の間から、書き手の警告は発せられる。このように関係ととらえ直された行為は、ことばの再配置によることばの救済という意味での「文学」と重なり合うことになる。

3. ことばの再配置としての文学的救済

先に、カベルが召命としての書く行為を「時の改良」と呼ぶことは述べた。これはまた、書き手が「ことばをよきものにすることを引き受ける」こととも言い換えられている¹⁶⁾。それはさらに、世界の捉え難さとして、わたしたちの耳に聴こえてくる外部性としてのことば

を救済することであるとされる。わたしたちは永続的な真理を手にはしていると思い込み、ことばをある用法の中に固定し、それを所有したつもりになる。カベル-ソローは、「所有」ということばを取り巻く概念を一旦解体し、再配置することで、ことばの所有を回復しようとするのだ。それは、詩作にもなぞえられる。

書きことばを用いた芸術作品の中で、すべての記号が重みと力を背負う形で完全に透明な意味にコミットすることを期待しえたのは、詩のみであった。『ウォールデン』の文学的野望は、散文においてそのコミットメントを負うことである¹⁷⁾。

ことばの所有を回復するためには、わたしたちの生活自体を捉え直し、その捉え直された生活なかにことばを配置し直すことが必要である。ウォールデンでの生活は、原始状態に戻ることや、自然賛美に没入することではなく、ことばの重みを、ことばの字義性を、再びウォールデンという場所での行為において受け止めることなのである。カベルにおいて、「ことばの字義性」と、「言語のうちである生活様式をとること」は同じことを指している。ここでもう一度、ソローは「書き手であるゆえに書く」とカベルが述べていることを思い起こそう。召命としての書く行為においては、何か別のことをあらわすためではなく、行為としてのことばのみが書かれる。

われわれが言語を所有するということは、言語のうちである生活様式をとることであり、われわれが言語に対して求めるものである。あることばを意味するということが、われわれがそのことばに回帰し、ことばがわれわれに回帰すること——われわれが互いに生じあうということ——であり、そのことは、ことばの字義性によって表現される、すなわち、他のどのものでもなくまさにこうした文字であり、ここにある、ということによって表現される¹⁸⁾。

カベルが叙事詩との関連で『ウォールデン』を扱うのは、文学をこのような「ことばの再配置」ととらえているからである。文学は、ことばを固定化された用法から解き放つ。そして、外部性としてわれわれに届けられる世界の捉え難さを、解釈を保留したままに書きつけるという意味において世界の謎に触れてもいる。立ちあらわれる新しい世界をとらえようとする文学においては、ことばの再配置が、ことばの所有を取り戻す試みがその度ごとになされているのだ。固定された用法からことばを解放することが、わたしたち自身にことばの所有を回復することでもある。

ここに、また問いは重ねられる。なぜことばの所有を取り戻さなければならないのか。それは、わたしたちがすでに生きているこの生活が、いまだ書かれていないからである。召命としての書く行為が、わたしたちがそれとは知らず生きているこの生活を書くということを手で述べた。わたしたちは関係としてとらえなおされた行為において、そのつど世界の謎

や世界の奥深さに触れている。そして、世界の奥深さに触れるこのような瞬間を書きつけることで、制度やシステムに捉えきれないはずの、人間の生を語ることは救済されるのである。ソローは、いわゆる経済用語で語りつくせるかにみえる人間の生きて死ぬことを、まず経済を人間の生活に取り戻し、営まれている生活に経済用語を置き直すことで回復しようとする。文学としての『ウォールデン』に刻みつけられる世界の捉え難さや、生活の生き生きとした姿に目を眩ませるわたしたちは、自らの閉塞した生活のあり方に気づくことになる、かもしれない。生活自体を捉え直し、その中にことばを置き直すことで、経済用語の連関の中に閉塞するわたしたちのことばの所有を取り戻すためには、『ウォールデン』が試みたような言語全体の文学的救済が必要だとカベルは考えている。

カベルにおいて、『ウォールデン』というテキストは、読むことでもある書くことと同時に立ち現れる。『ウォールデン』は、『センス・オブ・ウォールデン』に内包されるわけでも、それを絶対的に超越するわけでもない。『ウォールデン』が読まれ、そして新たに『センス・オブ・ウォールデン』におけることばに書き起こされることが、人間の生を描く文学的救済になりうるということである。だがそれは永続的な救済にはなりえない。そして、『ウォールデン』を文学ととらえることは、閉塞するわたしたちの思考が再び動き始めるための仕掛けでもある。カベルにおけることばの再配置としての文学的救済は、例えば次のように進められる。

腰を据えるということは、ものごとの重みを量ることに関係している。また、熟慮し熟考することとも関係している。思慮深く生活するとは、腰を据えることであり、自分自身を明瞭にすることであり、自らの足場を発見することである。重みをもつということは、あなたの人格の力によって、あなたのことばにおいて重みを支えているというだけではない。あなたを固くつなぎ止めている錨を引き上げ、航海に出ることである。そうになると、引力は、あなたを正しく惹きつけるものと関わっており、下方向であると同時に、上方向に向かうものであるかもしれない—あるいは上下と呼ばれるものは意味をなさなくなるだろう¹⁹⁾。

ことばがそれぞれの重みによって、新たな配置を取るとき、「上下と呼ばれるものは意味をなさなくなる」り、そして、確実さは不明瞭さに、所有することは手放すことになる。書く行為にのみ忠誠を誓う書き手は、二重性においてこれまで自分が所有していたと思いこんでいたことばを手放すことによって、ことばの所有を回復する。この瞬間に、人間の認識の枠組みに対する捉え方自体も改訂されることになる。

われわれの想像力、言い換えれば、イメージに対する能力、そして、イメージ—夜明けと昼と夜、低いものと高いもの、まっすぐなものや曲がったもの、熱いものと冷たいもの、凍ることと解けること、羽毛を脱ぎ替えること、鳥とリスと蛇と蛙、水とことばの家

と身体、成長と衰退、母と父といったイメージの意味や現象学に対するわれわれの能力は、世界についての知識の他の諸形式と同じく、アプリアリである²⁰⁾。

4. 預言者の歩み

カベルは、『ウォールデン』に「弁証法的な力、自己批評と自己定位の力」を見出している。その力は、アイロニーとユーモア、そしてそれにかかわる「ことば遊び」のあらわれともとらえることができる。ことばの所有を手放すこと、すなわちことばの喪失が、ことばの回復になるということは、カベル-ソローにおける弁証法的な力の向かう「方向なき方向」なのである。「ひとつのことばに固執するやいなや、それは細分化し、他のものへと広がってゆく」²¹⁾。このように見てくると、「時を改良すること」は右肩上がりに向上することとは別の仕方では向上することであると分かる。二重性において書く行為を遂行すること、つまり「自分自身に対する隣接性を保つためには、新しい、あるいは新しく構想される、恒常性と変化の能力が必要である²²⁾」。世界の捉え難さは、常にわたしたちに届けられているが、それをつかみ取って小箱に押し込めることはできない。こうして『ウォールデン』の次のようなことばへと、再び息が吹き込まれる。

最大の利益と価値は、かえってもっとも認識されにくいものである。われわれは、そういうものが存在することさえ疑いがちである。あるいはすぐに忘れてしまう。じつはそれらこそ最大の現実なのだ。もっとも驚嘆すべき、もっとも現実的な事実は、決してひとからひとへと伝えられることはないであろう。私の日常生活がもたらす真の収穫は、朝と夕べの色あいと同じように、触れることも言葉であらわすこともできない。いわば捕らえられた小さな星屑、つかみ取った虹のひとかけらである²³⁾。

カベルは、自ら『ウォールデン』を再び書き直し、改訂し、予見し直す。

われわれは、ことばの継起性、つまり、それらが次から次へと生ずるということを認め、そして、われわれの継起性にもかかわらず、ことばの方は永続的であると認めることを学ばねばならない²⁴⁾。

偃月刀によって書き手が真っ二つに切り裂かれることで、はじめてことばは語り始める。しかし、切り裂かれてもなお残る「私」がいる。これが、関係としてとらえ直される行為の一步を踏み出す「私」である。召命をうけとり、行為する「私」は、まさにソローがこだわろうとする「私」である。「私に固執するところが、本書とほかの書物とのおもなちがいである。話しているのはいつでも一人称の自分だということを、われわれはとかく忘れがちである²⁵⁾」。

『センス・オブ・ウォールデン』では、聖書の言葉とともに、予言者の行為が『ウォールデン』における行為とのかかわりで何度も取りあげられている。神のことばにおけるあらゆる救済の手はつくされたが、いまだ救済はもたらされてはいない。そのような今、「予言者」の意味づけもかわってくる。予言者は、その生活の営み方として予言を行為するのである。あたかも、文字がまさにそうした文字であるように。

「私」が、どのようなことば、どのようなことば遣いによって自分自身を受容するのかは、行為する「私」自身にもわからない。行為において預言者たることが、どこにも置き去りにすることのできない残留物としての「私」の生きてあることなのである。わたしたちは、「見失うこと、足跡をたどること、発見すること、土地から収穫をあげること、注意をすること、立てること、座ること、立つこと、歩くこと、腰を据えること、去ること」そして、書くことにおいて、自分自身が為していることを知り、ことばを回復することを学ばなければならない²⁶⁾。預言者は、待ち受けることを学びつつある者である。

『ウォールデン』を読むカベルにとって、一時的に逗留するという生き方を選ぶことは、帰るべきわが家を持つこととは決定的に異なる。所有することができるようなわが家は、そもそもない。なぜなら、われわれの過ごしているこの瞬間こそが、わが家となりうる時だからである。これはカベルが、あることが書かれるという事実そのものを、言われている内容と同じく重要であるとみなすことにもかかわっている²⁷⁾。

預言者は常に、希望と絶望の境界線に立っている。

※註

1) カベルは、ソローもカントの「われわれが知っているのは、何であれ、われわれが知ることができるためのアприオリな条件に適合するもののみなのだ」という考えを引き受けているという。しかし、ソローがカントと異なる点は、「こうしたアприオリな条件が、それ自体アприオリに知ることとはできず、実験的に発見されてゆくということである」(スタンリー・カベル 齋藤直子訳『センス・オブ・ウォールデン』法政大学出版局 2005年 114-115頁)。

2) 「書くことそれ自体についての私の主張は、すべての文学に関する一般的特性を意味するものではなく、この本『ウォールデン』におけるこの書き手の意図を個別的に承認するものである。」同書序文 xv 頁。

3) 同書序文 xiii 頁。

4) 同書 36 頁。

5) 同書 33 頁。

6) 同書 77 頁。

7) 同書 34 頁。

8) 同書 76 頁。

9) 同書 79 頁。

10) 同書 130 頁。

11) 同書 20 頁、および H. D. ソロー 飯田実訳『森の生活』上 岩波文庫 1995年 182-183 頁。

12) 『センス・オブ・ウォールデン』54 頁。

- 13) 同書 131 頁。
- 14) 同書 75 頁。
- 15) 同書 72 頁。
- 16) 同書 39 頁。
- 17) 同書 39 頁。
- 18) 同書 78 頁。
- 19) 同書 88 頁。
- 20) 同書 125 頁。
- 21) 同書 16 頁。
- 22) 同書 132 頁。
- 23) 『森の生活』下 85-86 頁。
- 24) 同書 77-78 頁。
- 25) 『森の生活』上 10 頁。
- 26) 『センス・オブ・オールドデン』48 頁。
- 27) 同書 33 頁。

(つじあつこ 京都大学大学院教育学研究科博士課程)